



聖結晶姫

天行本

大陸符術の脅威
封印された聖結晶



○登場人物紹介

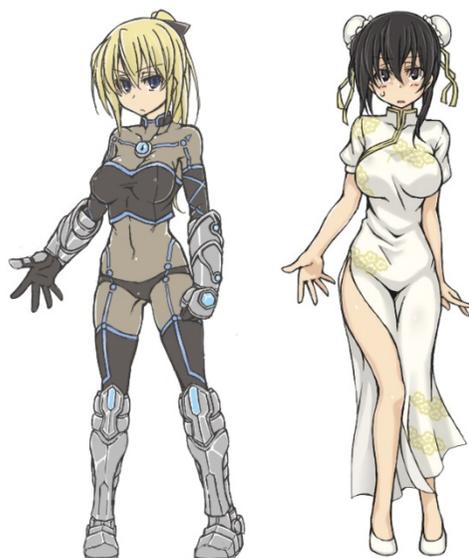
・蒼樹美月（あおきみつき）／聖結晶姫ミツキ

持ち主の心に呼応し、無限のエネルギーを生み出す精神感應結晶体「聖結晶」に100%の適合率を持つ奇跡の少女。

体内に移植された「聖結晶」の力を解放することで「聖結晶姫ミツキ」変身することができる。

変身後は圧倒的な戦闘力を発揮する半面、胸に露出した結晶体は変身ヒロインの最大の弱点でもある。幼少期から悪の組織と戦うことにその身を捧げてきたため、一般的常識にやや乏しい一面を持っており、特に人とのコミュニケーションを取るのが苦手。

悪の組織レギオンに捕らわれ、その肉体を淫らに開発されてしまった過去を持ち、純情な心とは裏腹に性的攻撃に脆い一面を持っている。



・朱麗蘭（ジュウレイラン）

悪の組織「朱」の女リーダー。

気やエネルギーの流れを感知する能力を持ち、体術や符術を駆使した戦闘スタイルを取る。

狡猾な計算高さを持っており、かつて科学都市の覇権を握っていたレギオンを滅ぼしたミツキを組織の手駒に加えようと淫惨な調教を企てる。



○用語紹介

・科学都市

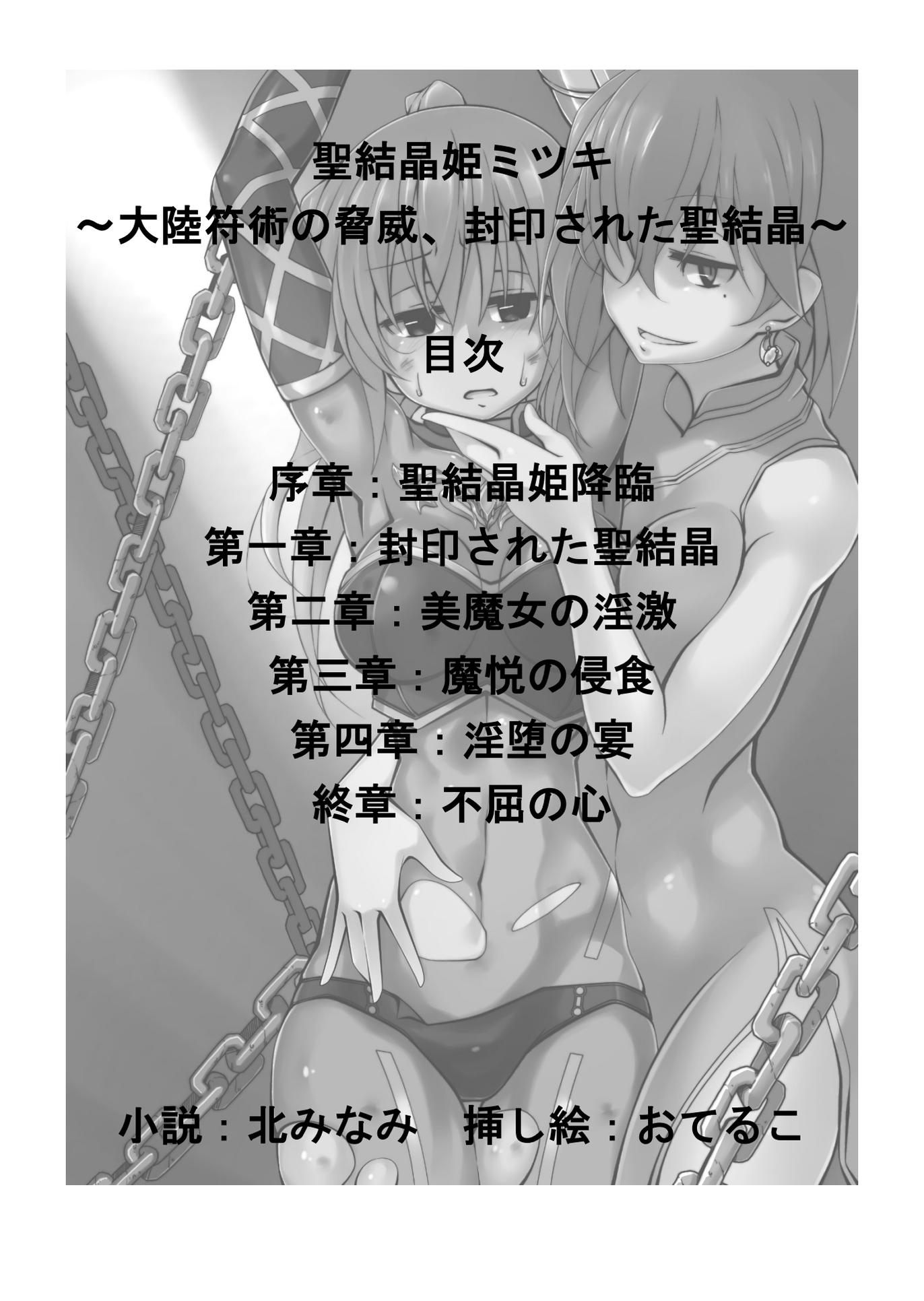
科学の発展のために研究所や病院、教育機関の集めた人口の浮き島。

かつては悪の組織「レギオン」によって裏から管理され、非人道的な実験場となっていた。

・レギオン

科学都市を牛耳っていた悪の組織。聖結晶姫ミツキの活躍により、組織は壊滅へと追い込まれたが、ミツキは過去に1度レギオンに敗れ、屈服調教を施されている。

※ミツキとレギオンの戦いについてはpixiv版(<http://www.pixiv.net/series.php?id=184272>)聖結晶姫ミツキを読んで頂けるとよりお楽しみいただけます。



聖結晶姫ミツキ
～大陸符術の脅威、封印された聖結晶～

目次

- 序章：聖結晶姫降臨**
第一章：封印された聖結晶
第二章：美魔女の淫激
第三章：魔悦の侵食
第四章：淫墮の宴
終章：不屈の心

小説：北みなみ 挿し絵：おてるこ

割れたスレート板の天井から、とある廃工場の中へと月の光が注ぎ込む。まるでアイドルのステージのスポットライトのように差し込む明かりは、その中心に一人の少女の姿を浮かび上がらせていた。

舞い上がった塵が月光に反射し、夜の冷たい空気がキラキラと輝いているように見える。自然の力によって生み出された幻想的な空間の演出により、佇む少女の姿は神話に登場する女神を彷彿させるほどに美しかった。

研ぎ澄まされた刃を思わせる切れ長の目はクールな凜々しさを感ぜさせる。強い意志を表す細い眉と堀の深い高い鼻。薄い桃色の唇がキュッと引き締められ、芸術的なパーツで構成された端麗な美貌は誰もが見惚れてしまう神秘的な雰囲気を感じていた。

整った顔立ちと同様、フィット感溢れる半透明のボディスーツに包まれた長身もまた優雅であると言わざるを得ない。

起伏に富んだ少女のボデイラインは首からつま先まで極薄のビニールシートのようなスーツが張り付いている。引き伸ばされた半透明な生地は色白の肌を薄っすらと透過させ、キュートなお臍の縦筋まで見えてしまっていた。

スラリと長い四肢にはエナメル質な黒のロンググローブとニーソックスが彩られている。密着性の高いコスチュームによって引き締められた手足は無機質な金属によって構成された銀色の手甲と脚甲を纏っている。鎧を連想させるそれらの装備は少女が今、戦いの場に身を置いていることを無言で知らせるのだ。

Dカップはあろうかという豊満なバストは隙間なく吸い付くインナーの生地を押し上げ、その上から巻かれているチュートップ型スーツに二つの山を形成している。大きさ、肉感共に申し分ない美巨乳は少女の意思の強さを表すようにツンと上向き、グラビアアイドル並の形の良さも持ち合わせている。

視線をそのまま下に下げていくと五十センチ台の細く括れたウエストが目に入る。華奢でも弱弱しさを感ぜさせない、アスリートのように鍛え上げ引き締まったお腹は大胆な色香を醸し出していた。

腰から続くヒップへのラインはDカップのバストと同様に女性らしい魅力に富んだ肉感を保持している。熟れた桃を連想させる流麗なヒップライン。密着するインナーはお尻の谷間どころか股間の割れ目にすら際どく食い込み、その上には胸と同色のショーツを履いていた。

扇情的な雰囲気を持ちながらも、決していやらしくならないのは全身を駆け巡る聖なるエネルギーの奔流からだろうか。

少女の胸で蒼く輝く結晶体。「聖結晶」と呼ばれる神秘の塊から流れ出す力は少女戦士の体に蒼いラインを浮かび上がらせ、破邪の力を与えていた。

眩しく輝く長髪のブロンドは黒のリボンによってポニーテールにまとめ上げられ、クールな美貌に牝豹を思わせる陰しさを付与させる。美しさと強さが組み合わさって生み出された奇跡のような存在。

それこそが聖結晶に選ばれし不屈の女戦士「聖結晶姫ミツキ」なのだ。

「グフフフ……こうも簡単に罠にかかるとは、最強と噂される聖結晶姫もたいしたことはなかったな」

「ムチムチのエロい体しやがって。たっぷりと楽しませもらうぜ」

下種な笑い声と共に目を細めた男達がミツキの周りをグルリと円形に取り囲んでいる。華奢な女戦士とは対照的な大柄な男達は異常なまでに筋肉を脹れあがらせ、中心にいる獲物をどう料理したものかと舌舐めずりをしていた。

「うまく行き過ぎていると思っていたのよ。やはり罠だったのね」

逃げ場を塞がれ多勢に無勢という危機的状況でありながら、ミツキの声には微塵の恐怖も感じられなかった。この程度では絶対に屈さない。強靱な意志の光を宿した切れ長の瞳は聖結晶姫を取り囲む敵を睨み付け、クールに鋭く輝いた。

「いいわ、このくらい丁度良いハンデよ。かかってきなさい」

恐れるどころか、逆に不敵な笑みを浮かべ腰を落とす聖結晶姫。強気な意志を示し、臨戦態勢に入った女戦士は手甲に包まれた拳をギュッと握りしめていた。

「舐めやがって！ いいぜ、俺達の力を見せてやるよ」

リーダー格と思われる男の合図を受け、ミツキを取り囲んでいた男達は赤い液体の入った筒を取り出した。先端に小さな針のついた筒を首筋に差し込みボタンを押すと、中に封入されていた液体が注入され、元々脹れあがっていた筋肉が衣服を引き裂きながら更に膨張する。もはや人と呼ぶことができない異形の怪物。目を血走らせ、獲物を狩ることに昂揚する獣達は一斉に円を狭めていった。

（なるほど、やはりこいつらも例の薬を使っていたのね）

異形の集団を前にしてなお、凜然とした表情を崩さぬ女戦士。豪快な風切音と共に敵の拳が繰り出される。華奢な少女がまともに受ければ体がバラバラになってしまいうような破壊の一撃。しかし、冷静に攻撃を見切った少女戦士にそんな力任せの攻撃はカスリもしなかった。

ステップを踏むような軽やかさで拳を交わしたミツキはガラ空きとなった敵の脇腹へと強烈なブローを叩き込んだ。少女の細い腕のどこにこれほどの力が隠されていたというのか。爆音を響かせ、めり込んだ拳を引くと筋肉の塊に手甲の形をした陥没が生じ、男は苦悶の表情を浮かべ後ずさる。

矢継ぎ早に次の敵が攻撃するも結果は同じ。ダンスでも踊るかのような優雅さを披露し、直後、蜂の放つ鋭いひと刺しのようなパンチが敵を悶絶させた。隙を突き背後から襲い掛かったところで、脚甲を纏った美脚が跳ね上がり、繰り出されたハイキックがこめかみを打ち抜いて返り討ちにする。

凜然と振る舞うミツキの拳が波状攻撃を全て凌ぎ、勢いに任せた攻撃の第一波を跳ね返す。構えたままの女戦士はこの程度で終わりなのかと、あきれたようなため息をつき、視線だけで返り討ちにあった男達を牽制した。

「どうしたの？ もう終わりかしら？」

「クソ、この小娘が！」

単純な挑発に乗り男の内の一人が単騎でミツキに攻め込む。単調な突進からの、大振り過ぎるパンチ。どうぞ、避けてくださいと言わんばかりの攻撃が当たるわけもなく、反撃の一撃が悪の化身を断罪する。

「その程度、遅すぎるわ！ ガントレット！ モードセイバー！」

凜とした鈴の鳴るような声に応え、聖結晶姫の手甲に蒼い半透明の刃が出現する。薄く、研ぎ澄まされた至高の刀身が月の光を受けて反射し、ブロンドポニーテールが軽やかに跳ねた。

「たあああああああ！」

放たれた一閃が敵の胴を両断し、蒼の残光が刃の軌跡を描いて静寂をもたらす。揺るがない正義の心が次は誰が相手だと告げている。ミツキを取り囲んでいるはずの敵達はひと睨みされただけで包囲の径を広げてしまい、生じた綻びを不屈の戦士は見逃さない。

密着スーツの下でムッチリと張りつめた太腿に力が入る。躍動する美脚が地を蹴り、前方に体を傾けたミツキは金髪をなびかせてターゲットにした男との間合いを一気に詰めた。電光石火の如きスピードは抵抗を許さず、銀の脚甲が踏み込むと共にコンクリートの床に円形のヒビを生じさせた。

捻りを加えた上体が独楽のように回転し、手甲の刃が強靭な肉体を通過する。数瞬遅れて傷口が開き、男は絶叫と同時に前のめりに倒れた。その時には既にミツキは次の目標へと向かっている。月の光を受けてキラキラと輝くポニーテールをな

びかせ、凶刃を振るい続ける戦女神。美しく力強い女戦士の戦いのダンスは人数の不利をもとせず、次々に敵を屠っていった。

高まる闘争心に応え、ミツキの胸の聖結晶は輝きを増していく。

——聖結晶。

それは使用者の精神力に反応し無限のエネルギーを生み出すオーパーツ。百パーセントの適合率を持つ少女の心に応え、生み出されたエネルギーは美少女戦士のパワーを引き上げ、スピードを加速させる。一騎当千の武力が津波のごとく敵を襲い、瓦解した包囲網は立て直す暇もなく、攻勢に転じた聖結晶姫によって一人残らず打ち倒された。

最後の一人を切り伏せ、周囲に伏兵がないことを確認したミツキは男達が使用していた注射器のような容器を拾い上げる。

(間違いないわ。やはり、最近出回っている薬と同じ物ね……)

空になった容器の表面には黒のインクでお札を連想させるシンボルマークが描かれていた。ここ最近、ミツキが討伐した組織のほとんどが使用している未知の薬。サンプルの一つでもあれば、その効果もハッキリと解析できるのだろうが、今は戦いの経験から予測する他ない。

(おそらくは肉体の強化が目的なのだろうけど。こんなものが出回っているのは、こいつらのように力に溺れた悪が後を絶たないわ……そう、かつてのレギオンのように)

苛立ちから奥歯をギツと噛みしめたミツキの手の中で空の容器が粉々に砕け散る。少女の中で甦る記憶が自然と闘志を奮い立たせた。

科学の発展を目的として作られた人口の浮島「科学都市」。かつてのこの都市は悪の組織「レギオン」によって裏から支配されていた。

研究機関、病院、学校。それらの施設は全てレギオンの世界征服のための薬物開発や兵器実験の基盤とされていた。

深い闇を抱え、圧倒的な力を持つ悪の組織に逆らえる者などいない。罪もない多くの人々が犠牲となり、一部の人間だけが富を得る歪んだ世界。そんな悪にたった一人で立ち向かった女戦士、それこそが聖結晶姫ミツキだったのだ。

レギオンによってたった一人の肉親であった母の命を奪われ、復讐心を糧に戦い続けた孤高の戦士。幾度も危機を迎え、一度は囚われの身となり地獄のような調教と肉体改造を施されたこともあった。

それでも、ミツキの根底ともいえる不屈の闘志は逆転の奇跡をもたらし、レギオン壊滅という目標を完遂させたのだ。

巨大な悪を滅ぼし、科学都市に平和が訪れる。そう、安心したミツキであったが、現実には純粹な心を無慈悲に裏切った。一つの悪の崩壊は、その下にある別の悪を浮上させる結果となる。皮肉なことに、それまでレギオンによって抑圧されていた複数の組織が次は自分達が科学都市の覇権を握るべく動き出したのだ。

今の科学都市に訪れた平和は薄氷の上の脆く儂いものでしかない。倒しても倒しても、後から湧き上がる悪の意思達。脅威の数は際限なく、戦いはいつ終わるともわからない。

(だけど、心折れてしまったらそこで全て終わりよ。どれほどの敵がいようが、全て叩き潰す……私は絶対に諦めたりしないんだから)

どんな時でも挫けず、最後まで屈しない。聖結晶姫ミツキの最大の武器である不屈の闘志を胸に秘め、少女は未だ戦い続けているのだ。

第一章 封印された聖結晶

鼻腔を刺激する印象的な香りを持つ香辛料の匂いが充満し、赤や黄色を主体とした派手な警戒色で一面の壁が染められていた。壁際にかけられた札や看板は漢字一辺倒で飾られており、異国の独特の雰囲気はその店の中に漂っている。

大小大きさの異なる二枚の円盤を重ね合わせた円形の大きなテーブルには豚まんやエビチリ、杏仁豆腐などが目に付く。喧騒と活気に溢れ、人々の賑わいを十分に感じられる空気は、この店が十分に繁盛している証拠なのだろう。

科学都市・中華区画。

科学の発展を第一に考えるこの都市の中において、異国文化の取り入れを推進したこの区画は、それだけで立派な異界と呼ぶことができる空間であった。

「蒼樹、これ三番テーブル」

「は、はいい！」

時刻は夕暮れ。週末ということもあり、店に押し寄せる客足がピークを迎える時間帯であった。まるで戦場のような厨房からグツグツと煮えた麻婆豆腐の大皿が出され、それを受け取る少女は緊張を隠せない引き攣った返事をする。

慣れていないというよりは、気持ち張りつめすぎて肩に力が入ってしまっている様子。視線は目指すテーブルを凝視するあまり他が視界に入っていないように感じられる。

おそらくはこの店の衣装なのだろう。白のチャイナドレスに身を包んだ少女が小走りで目的の席に麻婆豆腐の皿を渡した。年の頃は十●歳前後。背中につくほどの細く長い黒髪をお団子状にまとめ上げ、頭の左右にそれぞれ一つずつお手玉を乗せたような髪型になっていた。お団子はチャイナドレスと同じ色の布が被せられており、光沢感のある艶やかな黒髪とのコントラストが綺麗に演出されている。髪をアップにしたことで覗くうなじは少女の中にある女の感じさせる色香を醸し出していた。

シャープな印象を受ける前髪は眉にかかる程度の長さになっており、鋭く切れ上がった瞳はやや大人びた印象を与える強さを秘めている。美少女と呼ぶにふさわしい整った顔立ち接客を受ける男性陣からすれば、それだけで得をした気分になれるものであった。

しかし、その美貌もさることながら、チャイナ服を纏った抜群のスタイルもまた多くの人の目を惹くこととなる。

表面に白い花の模様が描かれた絹の生地は彼女の持つ起伏に富んだボディラインをしつかりと浮かび上がらせるほどに密着していた。詰襟に囲まれた首元から視線を下に落としていくと立体感のある胸の膨らみが見て取れる。Dカップはあるうかという申し分ない重量感。整えられた流麗なバストラインは形もまた芸術的であり、脇からのアングルでは白い布地の影響もあってか立派な肉まんが二つ乗せられているような印象を受けた。

ドレスの袖は二の腕の中間くらいの位置をピチっと止め、そこから続く腕は平均よりも少し長めであった。指先にまで凜としたオーラを宿す、鮮麗された刃のようにピンと伸びる細腕は肉感的なボディとは対照的に細さを感じさせた。

上乳からバストトップ、そこから続く下乳への線に影が付き、キュツと括れた細腰へとチャイナ服は続いていく。無駄な肉などついていない、強く抱きしめてしまつたら壊れてしまいそうなウエストラインはチャイナ服の少女に華奢という文字を宛がわせる。

だが、そんな腰から更に視線を下ろしていけば、次に目に止まるのは密着する白生地を押し上げるヒップライン。肉付きの良さを印象付ける、白桃を詰め込んだかのようなプリプリのお尻はフロアを歩き来する際に、その肉感をしつかりと保持しながら揺れ、後ろ姿もまた艶めかしい。それに加え、透き通るような白さを持つ美肌がチラチラと見え隠れしてはもう原則の領域だろう。

ボディコンシヤスな白のワンピースには深いスリットが入っており、歩を進める度に生足が惜しげもなく晒されるのだ。このスリットこそがチャイナドレスの魅了の一つと言わんばかりに溝は足の付け根付近まで切られている。

スラリと長い脚はそれでいて女性的な肉付きの良さに富んでいた。円錐型の太腿は鍛えられた筋肉の上に適度な脂肪が乗り、健康的でありながら色香に富んだ発育の良さを感じさせる。膝にかけて一旦締まっていき、脹脛にかけてメリハリの効いた脚線美を描いていた。綺麗に締まった足首から下には若干踵の高くなった白のシューズを履いている。

女性にしてはやや高め的身長の割には足が小さく、そこがまた凜々しさの中にある可愛らしさのようなものを内包させるのだ。

この可憐な少女の名は蒼樹美月。不屈の心を持つ正義の化身ヒロイン聖結晶姫ミツキのもう一つの名であった。

ここ最近、科学都市の裏側に根を張りつつある未知の薬の出所を探っていたミツキがたどり着いたのは「朱（ジユウ）」と呼ばれる中華系の組織であった。表向きは中華系の飲食店を営んでいるが、その陰では香や薬草に紛れた麻薬を取り扱っているという一面を持っている。

情報の真偽を探るため系列店舗の一つに潜入したミツキは業務の中、密かに正義のヒロインとしての行動を起こし、朱が薬物の拡散に関与していることを突き止めたのだ。

昨日殲滅した組織の男達が使っていた薬も間違いなく朱によるもの。悪を滅ぼすのならば根本から絶たなければいけない。強い決意を胸にミツキは戦いに備えて心を奮い立たせるのだ。

「おい！ ボサっとしてるな！ 手が止まってるぞ！」

「あっ、す、すいません……」

とはいえ、今の美月の戦場は店のホールだ。団体のお客が入ったらしく、お盆の上に水の入ったグラスをいくつも乗せた美月は額に汗を浮かべながらお客さんの待つテーブルへと向かう。

団体客は旅行客だろうか。中高年と思しき客達は麗しい姿の美月に目を惹かれ、視線は自然とチャイナドレス美少女へと注がれた。

（うっ……み、みんながこっちを見る……）

人々の視線を意識すると、決して軽快とは呼べぬ美月の動きが更にぎこちないものになっていく。油の切れたブリキの玩具でも、これよりはスムーズに動くであろう。膝の関節が動き方を忘れてしまったかのようにギクシャクしたものだ。

蒼樹美月は正義の変身ヒロイン聖結晶姫ミツキとして戦うべく、幼い頃から地下の秘密基地に隠れ住んでいた過去を持つ。その影響で義務教育は愚か、学校にすらまともに通ったことはなかった。

一般的な若者が経験するであろう、全てのことを犠牲にして戦士として戦ってきた美月。力の代償として彼女は一般的な常識に欠けるところがあつた。特にコミュニケーション能力という部分ではそれが顕著であり、大勢の人に注目されるといふことが一番苦手であつた。

一人一人を相手にしていた時でさえ、緊張してしまつていたというのに、今度は十人を優に超える団体客だ。美貌が精気を失つたかのように無表情に凍り付き、額と首筋を脂汗が幾筋も垂れていくのがわかつた。

（……し、失敗できないわよ）

真面目な性格は勝手に自分の中のハードルを上げてしまい、張りつめた気持ちは体に伝播してしまふ。お盆を持つ手がカタカタと震え、コップの中の水が波を立てて今にもこぼれそうになる。

ひとまずは水を渡して落ち着きたい。戦いの場では一歩も退かぬ強い闘志を持つ美月であつたが、このような場では勝手

が違うのだろう。珍しく弱気になってしまった。

「あっ!？」

それがいけなかったのだろう。

美月の右足はありえないことに自身の左足と交差してしまい、一瞬の内にバランスを崩してしまった。転んでなるものか
と意地を張ると、強張った体は膝のクッションを使う暇もなく重心が後ろに傾き、まろやかなお尻が豪快な音を立てて尻餅
をついてしまった。

ガッシャーーン!

お盆が宙を舞い、ガラスのグラスが床に落下していくつも破壊音を奏でる。

やってしまった。そんな後悔をする間もなく、転んだ美月に対し店中の視線が集まっていく。それこそ倍では効かない熱
視線に晒され、動揺を隠せない美月は起き上がることも忘れてあたふたとしてしまった。

「お、おおう!」

客の一人から感嘆の声が上がる。それもそのはずだ。人の目が美月に集まるのは単に大きな音を立てたことだけが原因で
はなかったのだから。

コップからこぼれ、ぶちまけられた水はそのいくつかが白のチャイナドレスを濡らす結果となる。ただでさえ、フィット
感のあるドレスは濡れることにより密着性を増し、表面に浮かび上がる空気の筋が着衣ならではのエロスを生み出していた。
黒髪から滴る水滴は美月の色香を増幅させ、美しい顔立ちを艶めかしく彩る。

なにより、尻餅をついた瞬間にチャイナドレスの裾が捲れ上がってしまい、その下に隠されていた黒のショーツが丸見え
になってしまっていたのだ。リボンとフリルの装飾が施された下着を晒し、尻餅という態勢上M字を描くように開かれた太
腿。

可憐で淫らなポーズを無意識の内にとってしまった美月が己の痴態に気が付くと、顔が真っ赤に染まっていく。悲鳴
の一つもあげない代わりに桃色の唇がプルプルと戦慄き、パニックになってしまった美月は「失礼しました」の一言もなく
立ち上がってホールから逃げ出すように走り出してしまった。

だが、慌てて走り出したのは失敗だった。今度はスリットの入ったスカートの裾を店内の観葉植物の鉢の突起に引っかけ、
またもバランスを崩して転んでしまったのだ。

うつ伏せに倒れたことにより、Dカップの美巨乳が床との間でクッションのように押しつぶされ、双乳の柔らかさを示す。への字に曲がった体は八十五センチの臀丘をピッチリドレスの生地に押し付け、内側から弾けそうな量感とパンティラインを浮かび上がらせていた。

お尻を突き出す恥ずかしすぎる格好。今度はすぐに立ち上がった美月であったが、それと同時に襟元のボタンが弾け飛んだのだが視認できた。

女性らしいボディラインを出すため、可能な限り密着性の高いサイズのドレスを着せられてしまっていた美月。五十センチ台のウエストに合わせて渡されてしまった衣装は八十六センチのバストには若干きつめであったのだ。

圧迫感と息苦しさを我慢しながらこのコスチュームを着続けてきた美月であったが、先ほどの転倒でボタンを留める糸が遂に限界をむかえてしまったのだろう。

パツン！

詰襟から鳩尾のあたりまで開かれたチャイナドレスはダイヤモンド型に肌蹴てしまい、シヨーツと同じ色のブラジャーを暴かれてしまった。美月の強気な性格がそのまま乗り移ったかのようなツンと上向いた形良い美乳。カップに収まる乳房の部分と、汗を浮かばせ白い肌を露出する部分のコントラストが呆れている。

下着を全て見られてしまう醜態を晒すなど場馴れした人間でも動揺してしまう。まして、大衆の視線を苦手とする少女ならばなおさらだろう。

胸元を両腕で隠し、耳まで真っ赤にして俯いた美月は今度こそ厨房の方へと姿を消していった。

潜入調査のためとはいえ散々な目にあつた美月が割ったグラスの数はこの日で通算百個に達していた。店長に呼ばれた月に告げられたのは解雇宣言。今まで彼女の容姿の良さに譲歩していた店長も流石に我慢の限界だったようだ。

(うううう……ま、まあ、いいわ。必要な情報は揃ったし、そろそろこの店も辞める予定だったのだから……)

店の裏口からトボトボとした歩みで出てきた美月は下唇を噛みながら、これも計画通りだと自分で自分を慰めるのだった。(それに例の取引は今夜。気を引き締めていかないと)

両手で頬をパンツ、と叩いた美月は心の内に眠るスイッチを切り替える。先ほどまで肩を落としていたはずの少女の目に確かな闘志が宿っていた。挫けることも落ち込むこともある。それでも何度でも立ち上げられる。だからこそ美月は不屈の戦士を名乗れるのだ。



その夜、蒼樹美月は息を潜め、港付近の倉庫街に身を隠していた。エナメル質の光沢感を持つ黒のライダースーツと漆黒を溶かし込んだような長い黒髪は夜の闇に同化し、誰にも気づかれぬ隠密行動を可能にしている。連なる建物の屋根に寝そべり、暗視用の望遠鏡で倉庫の内一つに荷が運ばれて行くのを確認した。

「予想されていたプランのBってところかしら。あれが最後のようね……あっ!？」

レンズ越しに覗いた先、高級そうな外車から一人だけ別のオーラを纏った女性が降車するのが目に入った。

——朱麗蘭（ジュウレイラン）。

美月が潜入捜査を行っていた朱の代表人物であり、そして今回の黒幕である女性の名だ。

屈強な男達を何人も従え、優雅ともいえる足取りで真っ赤なヒールが地面を叩き、歩を進める姿はハリウッド映画のスターがレッドカーペットを歩んでいるような印象を受ける。

大きな野望を秘めた瞳にはギラギラとした怪しい光が宿っていた。紫色の長い髪をひと房に結び上げ、リボンを添えて右肩の辺りに垂らしている。左目の下の泣き黒子に加えイヤリングと赤いルージュの組み合わせは成熟した大人の女性ならではの色香を纏い、紛れもない美女であった。

常に微笑を浮かべる口元は揺るぎない自信の表れなのだろう。両腕を胸の前で組みカッツカッツと響くヒール音に合わせて、豊かな胸が自己主張をするように揺れていた。

その名の通りの真っ赤なチャイナドレスによって彩られた美体。大胆に肩を露出するタイプのドレスは黄色いラインでふちどられ、隠しきれない熟れたボディラインを浮かび上がらせていた。丈の短いスカート部分にはスリットが入っており、ブラウンのパンツに包まれた美脚が伸びている。カモシカのように鍛えられた脚には女性的な魅力だけでなく、高い戦闘力が内包されており、彼女が只者でないことが窺えた。

麗蘭が倉庫に入ると大きな扉が閉められる。二人のガードマンが外の見張りについたのを確認すると、美月は一度望遠鏡を覗くのをやめた。

「人数も情報通り。時間通り取引は開始されたわね」

舞台は整った。ならば美月のやることはただ一つだ。あの場に踏み込み、全ての悪を一網打尽にすべく、少女は大きく息を吐いて深呼吸する。気を引き締め、細長の美しい指を胸元に当てると正義の戦士は力の解放を高らかに宣言した。

「お願い聖結晶、力を貸して。チェンジストラクチャー！」

戦いの意思に応えるように美月の胸元が蒼く輝き出し、膨大なエネルギー粒子を噴出しながら変身のための特殊力場が展開された。フィールドの中で衣服が消失し、生まれたままの姿となる美月。指を乗せていた胸元に正義の戦士の力の源たる聖結晶がまぶしいほどの輝きと共に出現すると、少女は目を閉じ、全身に行きわたる聖なる力の流れを感じていた。

全てをさらけ出した魅惑の裸体は首元から爪先までを半透明なインナースーツがコーティングしていく。フィルム生地のような滑らかさを持った極薄の生地は女戦士の柔肌に隙間なくピッチリと吸い付き、スタイル抜群の肢体をシェイプアップして瑞々しい若い肉体の肉感をよりアピールする。

Dカップはあろうかという形良いバスト、ほっそりと括れた腰回り、上向いて引き締まったヒップ、色香と力強さを兼ね備える美脚。そのどれもが光沢感のあるシースルスーツに包まれ、より強調される様子は神々しさと同時に艶めかしい色香を付与していった。

変身の第一段階であるインナースーツの形成が終わると今度はエナメル質な黒のロンググローブとニーソックスが指先とつま先から生成されていく。キラキラと光る粒子が体に纏わりついていく感触が心地良く、少女は安心感に包まれていった。二の腕までを覆うグローブと膝上までのソックスによって長い手足はより長く、細く見せるよう女神の四肢を彩った。胸部にはグローブと同色のチューブトップブラ型コスチュームが巻き付き、美巨乳の形を整えると同時に豊満さをアピールする。防御力よりも機動力を重視した設計の衣装はやや背徳感を感じさせた。

しかし、それ以上に股間部は際どいデザインとなっている。黒のショーツ型コスチュームは鼠蹊部が見えるほどキツク張り付き、肉感溢れる美尻に食い込んで尻肉がはみ出してしまっていた。

「ふうふうふう……」

少女は深く長い息を吐き、胸の結晶体から全身にエネルギーを伝播させていく。聖結晶を中心として蒼いラインがスーツの上を走り、力が漲っていくのが手の取るようにわかった。

気力の充実を感じながら変身は最終段階へと進んでいく。艶のある長い黒髪は根本から毛先にかけて金色に染まっていき、力場の中でなびく金糸は神話の中に登場する戦女神を連想させる。鮮やかなブロンドへと変わったロングヘアは黒のリボンによってポニーテールに纏め上げられ、背中にむけて垂らされた。

無機質な鎧を思わせる白銀の手甲と脚甲がグローブとソックスによって守られた四肢に装着される。美少女戦士の唯一の武装の構成が完了すると、変身フィールドを形成していた粒子が少女の頭上で余剰エネルギーとして天使の輪のように放出

された。

戦うための姿へとその身を変えた少女は鈴の鳴るような凜とした声で己が名を高らかに宣言するのだった。

「聖結晶姫ミツキ、ここに降臨！」

聖なる力の奔流を感じながら屋根の上で腰を落とし、膝を曲げたミツキは目標となる倉庫の屋根を見据えた。

(いくわよ！)

両腕を力強く振り、短距離で爆発的な助走を付けた聖結晶姫は倉庫の屋根に足跡の陥没を残す勢いで大ジャンプを繰り出した。月の光を受けて反射するブロンズがキラキラと輝きながら後方へなびき、翼を持たぬはずの戦女神は妖精のような滑空で風を切る。

跳び上がったグラマラスボディは放物線を描き、やがて重力に引かれて下降を開始する。両手を空に向け、着地点の誤差を目視で計算する聖結晶姫は十メートル以上を跳ぶ人間離れた動きにも冷静に対応し、クールな表情は眉ひとつ動かさずにタスクを消化していった。

変身後のミツキは常人を遥かに超える身体能力を手に行っている。砲弾の着弾するような爆音と共に倉庫の屋根に跳び移ったミツキは膝を折り曲げて衝撃を吸収。そのまま地面代わりの屋根に片手をつけ、体を回転させて慣性を制御すると右腕の手甲に聖結晶からのエネルギーを流し込んだ。

「ガントレット！ モードセイバー！」

気合のこもった掛け声に応え、右腕手甲に埋め込まれた青い宝玉を核として高エネルギーの刃が形成された。聖結晶のエネルギーによって生み出された青い半透明の刃身は向こう側が透けて見えるほどに薄く、研ぎ澄まされた業物のような切れ味を持っている。

「はあああああああ！」

充実したミツキのハートに呼応し、出力をアップした聖結晶が輝きを増す。下手な小細工などしない、正面からの強行突破。突然鳴り響いた天井からの轟音に驚きを隠せないでいた敵の構成員達をかく乱するように屋根をぶち破ったミツキは、大胆にも薬物の取引現場の中央へと着地したのだ。

「な、なんだこいつ！ いったいどうやってこんなことを！」

「てめえ、自分が何をしたかわかってるのか！」

突然の侵入者に対し罵詈雑言を浴びせる雑兵の面々。そんな言葉を聞く気もないミツキは視線を右へ左へと走らせ自身を囲む敵の位置と数を即座に把握していた。

ガキイイイインン！

「レディー相手に後ろからなんて、マナーがなってないんじゃないかしら？」

体を反転させながら起き上ったミツキは振り向くとほぼ同時に刃を振るい、背後から襲い掛かってきた男のナイフを弾き飛ばした。神速の斬撃は男の知る速さの定義を超え、呆気にとられて硬直しているところへ顎先を掠める掌底が見舞われた。

一瞬の内に脳がシェイクされ意識を刈り取られた男は糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ち、不敵に笑うミツキの表情が戦いのゴングとなった。

今度は一度に三人が別々の方向から聖結晶姫に襲いかかる。頭に血が上っているようできて戦い慣れた連中は的確な連携を取り、侵入者を排除するために最適な戦術を選択していた。

「——この程度で！」

しかし、その程度のコンビネーションでは百戦錬磨の女戦士に肉薄することは叶わない。ミツキにとってスローモーションに見える動きを軽やかなステップを踏みながら躲し、逸らし、弾き飛ばす。戦場にありながら優雅に舞うその姿は舞踏会の主役の座を射止めた姫君のごとく見る者を魅了し、戦いの最中におきながら綺麗であると認識させていた。

片手をついた状態から体を独楽のように回転させ、ローリングゴバットで三人の敵を一度に薙ぎ払うと、そこからバツク転を決め次の標的の眼前に接近するミツキ。包囲網を確立できず、数の優位性を保てない時点で勝負は決していたようなものであった。

同士討ちを気に掛けるあまり飛び道具を使えない男達は目にも止まらぬ聖結晶姫のスピードに翻弄され、五分と掛からず、全員が床の上に気を失って倒れこんでいた。

「ダークスーツと輝く金髪……流石は聖結晶姫ミツキといったところかしら」

最後にたった一人残った朱のボス、朱麗蘭は感心したかのような口調と共に拍手し、敵であるはずのミツキを認めた。護衛は一人も存在せず、圧倒的な戦闘力を持つ変身ヒロインを前にして余裕の態度を崩さないのは逆に不気味である。

「始めまして、朱麗蘭。あなたの悪事もここまでよ。こんな薬を科学都市に蔓延させて、人々の平和を脅かすような真似は絶対に許されないわ、観念しなさい！」

刃の切っ先を麗蘭に向け正義の叫びが空気を震わす。熱い闘志を宿した双眼は視線だけで人を殺せそうな殺気を放っており、神懸った力を持つヒロインには少しの油断もなかった。

「別に貴女の許しなど必要ないでしょ？ 止めさせたいというのなら力づくで止めるしかないわよ」
「……そう、だったら……そうさせてもらおうわ！」

一度大きく息を吐いたミツキは突貫に使う力を溜め込むため酸素を取り込む。聖結晶の力が負けるわけがない。自信に裏付けされた正義の一撃を繰り出そうと重心を前方に傾けようと腰を落とす。

「えっ!？」

——まさにその瞬間だった。つい先ほどまで五メートルはあったと思われた麗蘭との距離が限りなくゼロに近い間合いにまで詰められていた。まるで瞬間移動のようにして一瞬の内に懐に入れ、流石の聖結晶姫も対応が遅れる。

ドゴオオオオオ!

「がっ! はあっ! ううう、ゲホツ！」

(な、何が起きたの? それに、この衝撃は!?)

下腹に正拳を叩き込まれたミツキは両腕でお腹を庇うような格好で、足をフラつかせながら後退っていた。目で追えなかったというよりは、気が付いた時には攻撃されていた。そんな奇妙な感覚に戸惑う聖結晶姫の中で雑念が芽生えてしまう。

「それで逃げたつもりなのかしら？」

「えっ、また！」

確かに自分は距離を取ろうとしたはずだ。しかし、開いたはずの二人の距離はまたも一呼吸の間にゼロにされ、大地を震わせる踏み込みと共に強烈な肘打ちが寸分変わらず先ほどと同じ臍の下へと叩き込まれていた。

「あぐうう、きゃあああああああ！」

脚甲に包まれたミツキの両足が地面を離れ、今度は倉庫の壁へと叩きつけられるほどに弾き飛ばされてしまった。固い鉄筋コンクリートの壁に蜘蛛の巣の亀裂を生じさせたミツキの口から唾液が飛沫を上げて飛び出し、混乱が冷静な思考を妨害してくる。

(なんなの、今のは? まるで床を滑ってきたみたい)

チャイナドレスに包まれた足に注がれる視線に気が付いた麗蘭は口の端を吊り上げると、苦しそうに咳き込むミツキとは

対照的に涼しい笑顔を浮かべた。

「あら？ 二度目で気が付くとはレギオンを滅ぼした実績は伊達ではないよね。いかがかしら、大陸の武術の味は？」

一度目は反応することすらできなかった麗蘭の動き。しかし、二度目の攻撃を無防備に受けるほどミツキも未熟ではない。大陸の武術。おそらくは科学都市の外の世界で生み出された拳法であろうとミツキは予測していた。今までに見たこともない、足音を立てずに地面を滑るような独特の足捌き。瞬間移動したかのように見えた速さの正体はそこにあった。

しかし、それは半分正解で半分ハズレだ。ただの体術であれば、聖結晶の力によって身体能力を向上させたミツキが目で追いきれないなどということはない。

麗蘭のいう武術の本質。それは相手の呼吸と氣の流れを読むことにあった。いくらミツキが超人的な能力を持っているとはいえ無呼吸で戦い続けることはできない。剣道や柔道といった武道に共通するように呼吸法というのは戦いにおける重要なファクターなのだ。

大きく息を吐き、突撃のために酸素を取り込もうとした瞬間に攻撃されては聖結晶姫といえど対応はできない。加えて氣の流れ、ミツキでいうところの聖結晶のエネルギー伝達回路のことだ。

聖結晶姫が身に纏うコスチュームは生地こそ極薄だが、エネルギーを流し込まれた繊維は銃弾さえ防ぐ強度を持っている。見た目よりもずっと防御力のあるスーツの上から拳を叩き込まれた程度で内臓を揺さぶられるほどのダメージを負ってしまっていたのは麗蘭の知るところの氣の流れを妨害した点が大きい。聖結晶のエネルギーを失ってしまえば、強靱なボディーツは半透明のフィルムも同然だった。

幼い頃からレギオン打倒を誓い科学都市の地下に潜っていた弊害とも言える。麗蘭の放つ武術しかり、外の世界を知らな過ぎるという自身の生い立ちがミツキを窮地に立たせてしまっているのだ。

「ふ、ふん！ なによ、これくらいネタが割れればいいことは……ううう、えっ!？」

悪態をつき、気丈な態度を崩さぬよう麗蘭と対峙しようとしたミツキ。だが、少女戦士の思いとは裏腹に脚甲に包まれた脚は膝が震えてしまい、ダメージの深さを露呈してしまっていた。

「見え見えの強がりは見苦しいわよ。膝が笑っているじゃないの」

「これくらい、なんてことないわよ!」

(ど、どうして……体に力が入らない……立ってるのが、辛い……)

下腹。特に臍と恥骨の間にある部分は丹田と呼ばれ、東洋の医学では全身の気の集まる場所とされている。奇しくも、ミツキの持つ聖結晶の力の流れもまた丹田に集中する箇所があった。気の流れを乱す攻撃をエネルギーの集中箇所へ二度も叩き込まれてしまったという事態は戦乙女の体を流れる聖なるエネルギーの量を大幅に制限してしまっていたのだ。

「負けない……私はこんなところで負けるわけにはいかないのよ！　お願い聖結晶、もっと……もっと私に力を！」

確かにダメージを負ってしまった。しかし、不屈の戦士を名乗る女戦士がこの程度で敗北を認めるなどありえるはずがない。気持ちを昂ぶらせ、より多くのエネルギーを生み出そうと胸元の結晶体に呼びかけるミツキ。少女の意思に呼応し、輝きを放つ聖結晶は膨大な量のエナジーを少女戦士の体へと送らせた。

「きゃあああああああああーっ！」

だが、発せられたのは布を裂くような悲痛な叫び。輝きを放ったはずの結晶体が明滅し、ファイティングポーズをとっていたはずのミツキの両腕が力なくダランと垂れた。八の字に開いた脚が辛そうに震える膝を擦り合わせ、倒れることを辛うじて防いでいる。

（な、な、なに？　今度は何をされたの？）

冷笑を浮かべる麗蘭はその場から一步も動いていない。それだというのにミツキの全身を襲ったのは神経をズタズタに引き裂かれたような激しい痛みだった。理解が追い付かず、フラつく聖結晶姫。露呈してしまう弱弱い姿は対峙する敵に確かなダメージを受けたことを伝えてしまっていた。

エネルギーの循環の障害は単純に出力を抑えるだけではない。麗蘭の攻撃によって今のミツキのエネルギー回路は一部分が細くなってしまっているような状態だ。本来の許容量を下回るサーキットに全開のエネルギーを注いってしまったがため、まるで聖結晶が暴走したかのようなフィードバックがその身を焦がしていた。

不屈の心に呼応し無限のエネルギーを生み出せる聖結晶を持っていても、それを扱えるだけの器が整っていなければ意味がない。傷ついた体に自分自身で追い打ちをかけてしまった女戦士は既に本来の力を出すことができない状態にされてしまっていたのだ。

「ほら、気を抜いていいのかしら」

「うっ、くうううう！」

エネルギー回路がショートしたような焼ける痛みも引かぬ内に麗蘭の追撃が開始される。この窮地を凌ぎたいミツキであ

ったが、背後はすでに壁。後退は許されず、力を振り絞って右手の刃を突き出した。

しかし、エネルギーを抑えて行わなければいけない攻撃ではキレもスピードも中途半端になってしまう。ブレードを軽くいなされてしまったミツキの鳩尾に容赦ない掌底が叩き込まれ、聖結晶姫の体が一瞬間に浮いた。

「がはっ！ あ、あ、あ、あ……」

お腹から背中にもで突き抜ける衝撃。スーツは確かに機能しているはずなのに、まるで巨大なハンマーで腹部を殴られたかのような痛みがミツキを蝕み、だらしなく開いた口から舌がこぼれ落ちる。唾液がポタポタと垂れ、目を白黒させて後ろへ倒れそうになった。

幸か不幸か背中を背後の壁に預けることでダウンだけは回避できたが、内臓に与えられたダメージは聖結晶姫から完全に機動力を奪っていた。

カクン、カクンと両膝が痙攣を起こし、肉付きの良い太腿を密着させて堪えるのがやっと。顔を上げられず、絞り出されてしまった酸素を必死になって肺の中に取り込んでいる様子だった。

そして、ミツキを襲うのは肉体的苦痛だけではない。気の流れを妨害する麗蘭の打撃は一発受ける度にその効果を増していくのだ。被弾すればエネルギーが低下し、エネルギーが低下すれば被弾しやすくなる。受ければ受けただけ逆転が困難になる負のループ。

最初の足捌きに気が付けず、意識の外からの一撃を下腹に叩き込まれた段階で勝負は決してしまっていたのかもしれない。「はあ、ぜはっ、ぜえ……こ、このっ！」

息も絶え絶えになりながら、動けぬミツキが苦し紛れに放った拳は軌道が波打ち力強さの欠片もない。必死の思いで搾り出した攻撃は簡単に躲かれてしまい、チャイナドレスが翻ると脇腹に強烈な蹴りが叩き込まれた。つま先がスーツ越しに食い込み、細腰がミシミシと嫌な音を立てる。

視界がブレ、こみ上げる吐き気を抑えることができない。グラマラスボディをくの字に折り曲げ両手で口を覆うと、指の隙間から逆流した胃液が溢れ出し、胃が痙攣を起こして始めてしまった。

またも低下する聖結晶の出力。

体を内側から壊される地獄から逃れようと身を振るも、そんなものは焼け石に水だった。動けぬ肢体は暴虐のマトとなり、次々に武術を見舞われた。

ドボオオオオッ！

「オエッ！　が、あああああ……あぐうう！　げへえ、ハア、ハア……あぎゃあああああー！」

凄まじい打撃音の後に響く悲鳴。半開きのまま閉じることができなくなってしまった桃色の唇を割って咽び喘ぐ声が発せられる。体を壊され、エネルギー回路を閉鎖されていく地獄。反撃する余力もないミツキは一方的な打撃の嵐を避けることもできずに受け続けるしかなかった。

抜群のプロポーシオンを誇る瑞々しい少女戦士の体躯は柔らかな肉の詰まったサンドバック。両肩を掴まれ、苛烈な膝蹴りが何度目になるかわからない腹部への攻撃となつて襲い掛かる。

「おええええええ！　げえ、げえ……は、はあああ〜」

（お腹が壊されちゃう……力がドンドン抜けて……エネルギーが全然回せない。いくらなんでも、これじゃ……）

もはや自分の足では立っていられず、膝蹴りを放つた麗蘭にもたれかかるミツキ。汗だくになつた頬に金色の糸を思わせるほつれた髪が張り付き、女性らしい丸みを帯びた肩が上下に激しく弾んでいる。引き攣つた呼吸を続ける獲物の弱り具合を確認した麗蘭は邪悪な笑みを浮かべると、首相撲の要領でポロボロの女戦士を投げ飛ばした。

受け身も取れずにコンクリートの床に叩きつけられたしまった聖結晶姫。酸欠気味のボディから空気が搾り出され、頭を激しく打ち付けた反動で意識が朦朧としてしまう。

聖結晶はミツキの意思の強さに反応してエネルギーを生み出している。途切れそうな意識では当然根本の出力も低下してしまい、聖なる宝玉は輝きを失っていった。

「あらあら、いつまでも寝ていいのかしら？」

仰向けのまま床に寝そべるミツキに対し、嘲笑を浮かべた麗蘭は真っ赤なヒールを履いた美脚を振り上げた。狙うは正義のヒロインの核、胸の聖結晶。振り下ろされた鋭い踵が輝きを失いかけている蒼い宝石へと襲い掛かる。

「うっあああああああ！　ぎゃあああああーっ！　あぐううううううっ……！」

（か、体がバラバラになっちゃう！　ダメよ、聖結晶だけは攻撃されちゃ……でも、ち、力が入らなくなつてく、うううう……）

聖結晶。それは破邪の力の源にして、同時に剥き出しになっている最大の弱点であった。

改造手術を受けたミツキにとって聖結晶は臓器の一部も同然なのだ。この程度の攻撃で壊されるほど脆いものではないが、

ぶ激しい痙攣によって残された体力を根こそぎ奪われ、筋肉が溶けてしまったように力が入らなくなってしまった。
トサリ！

背中を床に付け、焦点の合わない目が倉庫の天井をボーっと見詰める。過呼吸気味の引き攣った呼吸を繰り返して喘ぐミツキの胸元では護符を貼られた聖結晶が光を失っていた。

「光を失っても変身は解けない、と。まだまだ謎の多い結晶のようね……でも」

茫然とするミツキを見下ろした麗蘭は敗北の戦士の頭をゴツリと踏みつけ高らかに勝利を宣言する。

「聖結晶封印完了。これでもう貴女は普通の女子高生並の力も出せない、か弱い乙女に成り下がったのよ。ふふ、私達「朱」が科学都市の新たな覇者となるため、貴女を手駒として利用させてもらおうかしら」

悪女の高笑いが響き渡るも、力の源を封印してしまった敗北戦士には言い返すだけの体力が残っていない。
封じられてしまった聖結晶の力。

大陸符術によって無力な少女へと貶められた正義の変身ヒロインへの敗辱調教が始まろうとしていた。



※体験版は以上になります。
続きは製品版にてお楽しみください。